りびんぐらいぶず　令和2（2020）年5月第3号

念佛と信心の関係（就行立信のありよう）

◆ご讃題

◆就行立信（じゅぎょうりっしん）

次に行に就きて信を立つといふは、しかるに行に二種あり。一には正行、二には雑行なり。正行といふは、もっぱら往生経の行によりて行ずるは、これを正行と名づく。何者かこれなるや。一心にもっぱらこの『観経』・『弥陀経』『無量寿経』等を読誦し、一心に専注してかの国の二報荘厳を思想し観察し憶念し、もし礼するにはすなはち一心にもっぱらかの仏を礼し、もし口に称するにはすなはち一心にもっぱらかの仏を称し、もし讃歎供養するにはすなはち一心にもっぱら讃歎供養す、これを名づけて正となす。またこの正のなかにつきてまた二種あり。一には一心にもっぱら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問わず念々に捨てざるは、これを正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるがゆゑなり。もし礼誦等によるをすなはち名づけて助業となす。この正助二行を除きて以外の自余の諸善はことごとく雑行と名づく。もし前の正助二行を修すれば、心つねに［阿弥陀佛に］親近して憶念断えず、名づけて無間となす。もし後の雑行を行ずれば、すなはち心つねに間断す、回向して生ずることを得べしといへども、すべて疎雑の行と名づく。ゆゑに深心と名づく。

（Ref『散善義』「就行立信」七祖註釈版聖典 p463）

◆三選の文

はかりみれば、それすみやかに生死を離れんと欲（おも）はば、二種の勝法（しょうぼう）のなかに、しばらく聖道門を閣（さしお）きて選びて浄土門に入（い）るべし。浄土門に入らんと欲はば、正雑二行（しょうぞうにぎょう）のなかに、しばらくもろもろの雑行を抛（なげす）てて選びて正行に帰すべし。正行を修せんと欲はば、正助二業のなかに、なお、助業を傍（かたわ）らにして選びて正定（しょうじょう）をもっぱらにすべし。正定の業とは、すなはちこれ仏名を称するなり。名（みな）を称すれば、かならず生ずることを得。仏の本願によるがゆゑなり。

（Ref『選択集』「三選の文」七祖註釈版聖典 p1285）

註「正行」→浄土教では、とくに阿弥陀佛に対する読誦・観察・礼拝・称名・讃歎供養の五を、阿弥陀仏に関係のない諸善万行（＝雑行）に対して正行という。

註「助業」→五正行の中の称名以外の読誦・観察・礼拝・讃歎供養は、称名の助けとなり伴われて往生行を荘厳する宗教儀礼となる行業であるから助業という。

註：法然聖人は、この就行立信釈に込められた意味に心開かれ、特に最後の「順彼仏願故（かの仏の願に順ず

るがゆえなり）が領解できたとき、経蔵の中で、聞く人はいなかったけれども「阿弥陀如来は、私のような愚かなもののために、かねてから、念仏の一行を選び取って下さっていたのか」とつぶやき、涙が止まらなかったといわれております。

◆親鸞聖人のご述懐

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀に助けられまゐらすべしと、よきひとの仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。

(Ref『歎異鈔』「第二条」註釈版聖典 p832)

◆はじめに

親鸞聖人が法然聖人の仰せを受けて回心し浄土真宗に帰入された本願念仏の信心の内景を表現されたお言葉と善導・法然の御言葉を対比して拝読しますと、**「就行立信釈」**と**「三選の文」**と**『歎異鈔』第二条**の親鸞聖人のご述懐のお言葉が全く同じ内容をそれぞれの表現で顕示されていたことがわかります。

◆念仏と信心の関係（就行立信のありよう）

法然聖人は、『西方指南抄』下本に収録されている大胡の太郎実秀への「御消息」のなかで、念仏と信心の関係（就行立信のありよう）を次のように述べていらっしゃいます。

「しかればたれだれも、煩悩のうすくこきおもかへりみず、罪障のかろきおもきおもさたせず、ただくちにて南無阿弥陀佛ととなへば、こえにつきて決定往生のおもひをなすべし、決定心をすなはち深心となづく。その信心を具しぬれば、決定して往生する也。詮ずるところは、ただとにもかくにも、念仏して往生すといふ事をうたがはぬを、深心とはなづけて候なり。

あるがままで南無阿弥陀佛ととなえれば、そこに聞こえてくださるものがあります。それは「なむあみだぶつ」です。親鸞聖人も「摂取して捨てざれば、阿弥陀となづけたてまつる(弥陀経讃 p572)」と仰せられているように、南無阿弥陀佛とは、「そなたを必ず救う」と仰せられている如来様のお言葉だったのです。それを聞けば、自然に「私は必ず浄土へ生まれさせて戴ける」という決定の信心が生まれてくると法然聖人は仰せられるのです。

それは南無阿弥陀佛とは、もともと人間の声ではなくて、私を喚び覚ます阿弥陀仏の「大悲招喚の声」だったからです。念仏するとき、私は、名号を称える者から、名号を聞く者に変って行き、そして、「南無阿弥陀佛」と招喚（招き、喚び覚ま）し続ける如来に聞遇させて戴くのです。南無阿弥陀佛は、私に称えられている「客体」ではなくて、実は「そなたを救う私がいつも見守っているから安心してまかしなさい」と私を喚び覚ます「主体」であり、私は如来のみ言葉に

喚び覚まされ、救われる「客体」で在ることに気付かせていただいて安心していることを**信心**といい、この主格の転換を**「回心」**というのです。

こうして生も死も、妄念も煩悩も,すべてを仰せの通り本願力におまかせしていることを**「弥陀をたのむ」**というのですから、自力では決して信じることのできなかった極難信を、如来よりたまわった至極の易行によって難なく得させていただくわけです。

それを親鸞聖人は、「一には難は疑情なり。二には易は信心なり］（『愚禿鈔』、註釈版聖典 P505）と仰せられたのでした。南無阿弥陀佛という至極の易行をもって、人間の知識では決して信受することのできなかった、「必ず浄土へ往生し成仏せしめられる」という決定往生の信が恵まれるわけです。それを法然聖人は、「その信心を具しぬれば決定して往生する也」といい切って行かれたのでした。そして、念仏という大行をお聞かせ下さる所聞･所信の「教法」とし、それを疑いなく信受する信心を機受（うけごころ）として、行と信を誓願一仏乗の法と機として顕されたのが『教行証文類』の大行と大信の釈義だったのです。合掌。

（後書き） 梯　實圓和上の『親鸞教学の特色と展開』『本願念仏の伝承 p400～410 頁をそのまま頂戴しました）合掌。

◆仏教壮年会お聴聞の会六月7日(日)二十時より

◆仏教婦人会例会　六月十六日(火) 十九時半より

著作編集兼発行元（本願寺派 正覚寺内）〒520-0501 大津市北小松四五二番地

TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥